35　整形外科医の先達・各務文献～二百回忌法要を終えて

今井　　秀
今井整形外科・皮フ科

2018年10月14日は各務文献（1755–1819）の命日のため，墓所のある夕陽丘浄春寺において二百回忌法要を執り行いました．浪速の三医会である大阪府医師会，大阪臨床整形外科医会，日本医史学会関西支部が共催して法要を行い，同時に浄春寺山門頭には各務文献の遺徳を顕彰する記念銘石板を作製し除幕いたしました．

各務文献はまさに浪速が生んだ整形外科医の先達です．整骨科といえば柔道整復をイメージする方が多いと思いますが，江戸時代には整形外科という言葉はなく，整（正）骨科と云っていました．ちなみに整形外科という言葉を初めて用いたのは東京帝国大学整形外科初代教授の田代義徳で，文献がひたむきに生きた時代のおよそ100年後の1906年になります．

各務家は代々赤穂藩浅野侯の家臣でしたが，主家断絶後は大坂の横堀に移住しました．文献は1755年に横堀の炭屋町（現在の心斎橋辺り）で生まれ，この地で初め古医方を収め，のちに産科を志し救産器八種を発明し母児双全に努めました．しかし，難産を救う要は賀川玄悦翁の鉄製鉗子のみと悟り，賀川一門には及ばないと悟りました．

文献は「医学は相伝に非ず．旧法を墨守すれば，千年前に帰するのみ．実物知るを第一となす」と考え，1800年4月25日に幕府の許可を得て大坂葭島にある今木刑場で橋本宗吉の塾・絲漢堂の同僚である伏屋素荻，大矢尚斎と共に双子を孕んだ37歳女囚の刑死体の解剖に参加し，『婦人内景之略図』を描きました．これは『解体新書』が世に出た26年後のことです．

しかし文献はこの解剖に満足することなく，次第に人体の骨骸に興味を抱くようになり，整骨科だけは古来未だこれを精しくする者を聞かないため整骨科を志しました．その後も今木刑場から刑死体の屍を妻の協力のもと自宅まで舟で持ち帰り（いわゆる真骨収集し）解剖を行い，極めて精緻な骨の解剖図「各骨真形図」を描きました．

その後，骨折や脱臼の整復法や，副木・包帯などによる固定法についても創意工夫し新しい知見を導入しました．さらに麻睡散（曼陀羅華と白蛇の二味）を創薬し，重度の骨折や脱臼整復時の全身麻酔法としました．麻睡散はすでに『整骨撥乱』（1804年11月自序，未刊）に記載され，これは華岡青洲が麻沸散（曼陀羅華と草烏頭，白芷，当帰，川芎など）を用い世界初の全身麻酔下での乳癌摘出手術に成功した1804年10月13日とほぼ同時期かそれ以前の快挙です．また，「ますい」という言葉を我が国で最初に用いたのも文献です．ついに文献は草稿である『整骨撥乱』をまとめ1810年に『整骨新書』三巻を上梓しました．

また，文献は勉学のために工匠田中生に命じ人骨を忠実に模した等身大の木彫骨（各務模骨）を作らせ，1819年2月に門人中山樹（後の娘婿・各務相吾）がこの木骨に『模骨呈案』の書を添えて江戸に行き，石坂宗哲や大槻玄沢を介して幕府医学館に献納しました．幕府からは褒賞金20両が下賜され，文献は「吾が志願畢れり」と喜び，この年の10月14日に病篤くして65歳でこの世を去りました．

さらに実物の三分の一大の木骨を作り，これを常に座右に置き弟子たちに按撫させ，解剖を熟知させて骨折や脱臼の整復に役立てました．この小木骨は1959年に開催された第15回日本医学会総会の「資料で見る近代日本のあけぼの」展に出品展示され，箱書には「医学歴史的遺物，大阪各務文献先生自彫人骨，明治二十二年山田ノ紹介ニテ購入ス，仕入持人各務呑玉ト云フ軍談師　石黒忠悳」と書かれていました．

各務文献の人となりは慷慨して（正義感が強く，不正な行為に憤り嘆き悲しんで）済世の志を抱き，独創性と先見性を併せ持ち実学を重視した医家でした．『整骨新書』凡例に，文献は「余医ニ志シテヨリ，専ラ救済ヲ以テ任トシテ其意唯実ヲ得ルニ有リ」と述べているように，我が国近代整形外科への道標を示し，不滅の業績を遺した名医中の名医だったのです．そして没後100年目にあたる1919年に，従五位を追贈されています．